

生活観察の習作・鳥瞰図

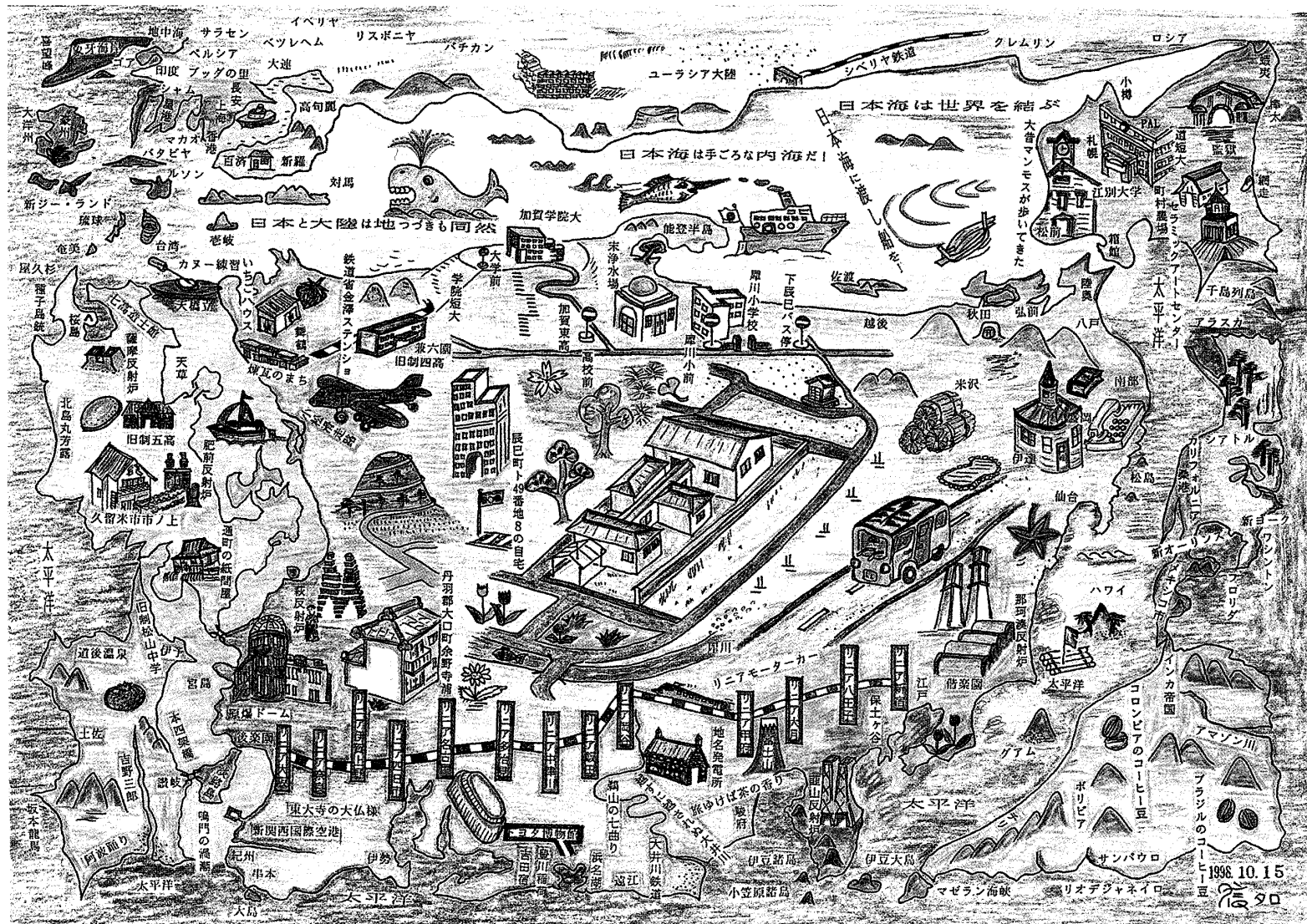
Works for the Study of Living Space : Bird's-Eye Views

水野 信太郎

Shintaro MIZUNO



「江別を中心とした鳥瞰図」

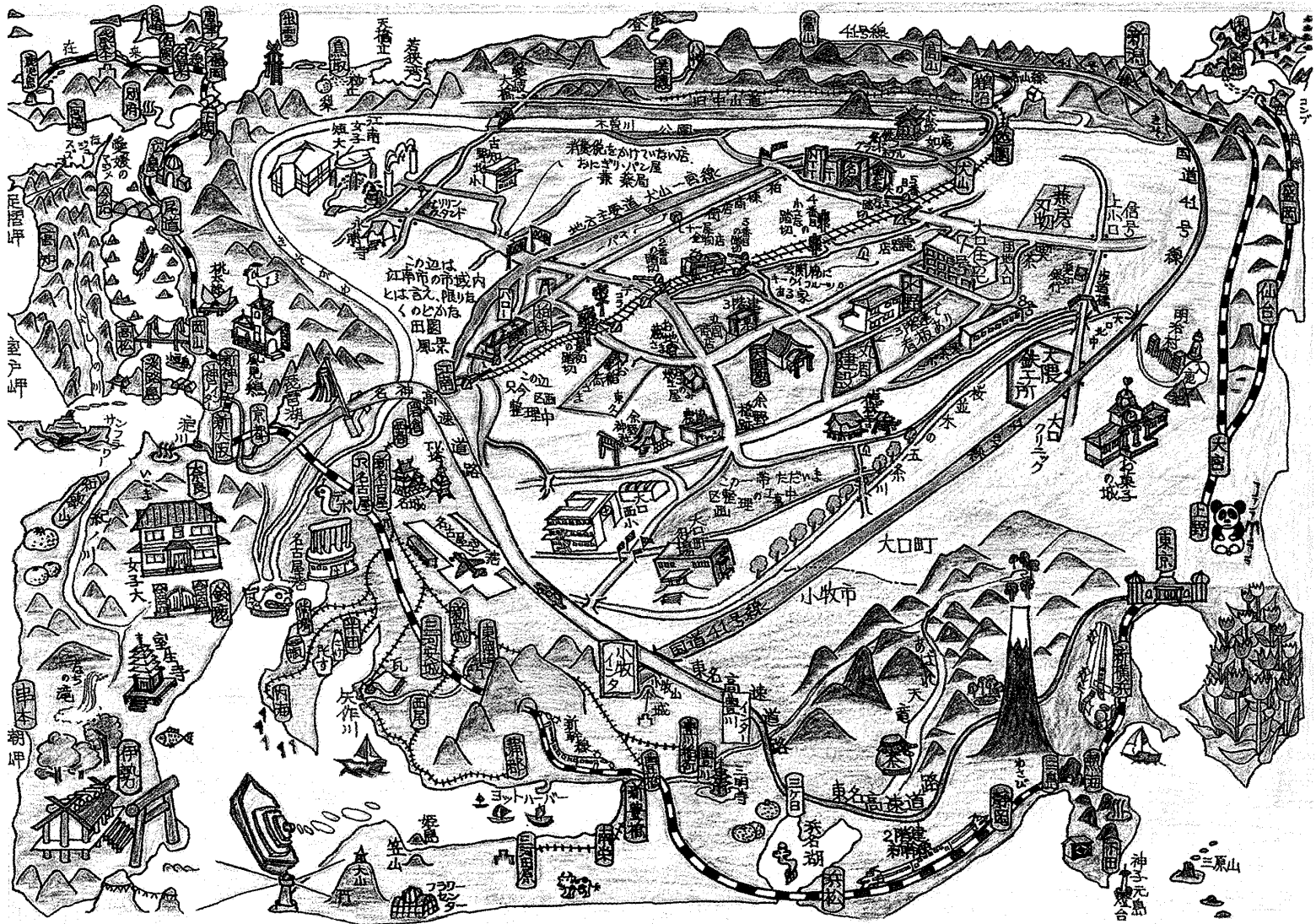


「日本を中心とした世界図」

1998. 10. 15
タカ



「金沢を振出した道中双六」



「東海道を中心とした鳥瞰図」

364×257

わが国には通常の視点よりも少し高い位置から、より広い視野を俯瞰する絵画の技法がある。これは、より良好な視界を確保するという目的を達成するための手法であった。この方法で室内空間あるいは単体の建築物を描いた作品としては「源氏物語絵巻」ほか、さらに都市全体を表現したものとしては「洛中洛外図屏風」などが好例であろう。

ここに掲げた作品群は、日本の近代において確立された都市鳥瞰図の系譜に含まれる。これらを作品化するためには、まず日常空間を見つめなければならない。また作者自らの意識を研ぎ澄ます必要がある。したがって鳥瞰図の制作には、自分の生活そのものを観察するトレーニングとしての意味が含まれる。生涯学習の試みとして、この意図に基づいて本学短期大学部工芸美術学科最終学年の「図学・製図」履修者全員がそれぞれ完成させた鳥瞰図の全45作品を現在、本学のホームページ上 <http://www.asaigakuen.ac.jp/> で発信している。是非、参照願いたい。鳥瞰図という課題を通して、故郷や江別市に対する彼女たちの思い、すなわち生活空間への愛情と責任が芽生えたことを感じとっていただこう。

生涯学習の学問的な一領域にまちづくりが含まれるが、将来のまちづくりにあっても鳥瞰図は有効である。激しい都市環境の変貌に接して、高齢者が道に迷う状況が生じる。この時に救いとなるのは、往時の重要な記憶である。つまり原体験の中で生き続けている地藏堂や小径そして小川の橋などである。これら道案内の目印が持つ大きな意味を考えると、軽率に取り壊されるような事があってはならない。更にまちづくりを進める際には、鳥瞰図で取り上げてもらえるような魅力あふれる郷土を実現したいものである。なお結論として江別は、大学と煉瓦そして広い大地と太陽がある大都市圏のまちと言えよう。

参考文献

- 『日本の美術 10巻 やまと絵』家永三郎，平凡社，昭和39年12月20日
- 『日本繪巻物集成 第五巻 源氏物語繪巻・寝覺物語繪巻・狭衣物語繪巻・枕草子繪巻』田中一松解説，雄山閣，昭和4年12月5日
- 『ブック・オブ・ブックス日本の美術17 障屏画』武田恒夫，小学館，昭和46年5月10日
- 『標注 洛中洛外屏風 上杉本』岡見正雄・佐竹昭広，岩波書店，1983年3月28日
- 『日本の美術 No.135 南蛮屏風』坂本満，至文堂，昭和52年8月15日
- 『ラパン 羅盤 3月号 第1巻 第6号 通巻6号』赤岩州五，ゼンリン，1998年3月15日，P-8に本稿の「金沢を振出とした道中双六」を発表した。
- 『レトロでモダンな地図の旅 鳥瞰図の世界』狭山市立博物館，同博物館，平成13年3月
- 『古地図研究 307 吉田初三郎特集』長瀬昭之助，日本古地図学会，平成12年3月1日
- 『パノラマ地図を旅する ——「大正の広重」吉田初三郎の世界 ——』堺市博物館，堺市博物館，平成11年4月24日
- 「都市鳥瞰図と吉田初三郎」水野信太郎・水野由美，『都市学研究 創刊号』金沢学院大学 都市学研究所，同研究所，平成11年3月31日，PP.75-86
- 「資料 日本全国鳥瞰図一覧」水野信太郎・水野由美，前掲『都市学研究 創刊号』PP.87-113。なお『都市学研究』の表紙装画には、水野研究室所蔵の吉田初三郎筆「金澤市鳥瞰圖」（部分）を採用した。
- 『平成10年度特別展 愛知県を中心とする 鳥瞰図の世界 吉田初三郎とその周辺』江南市歴史民俗資料館，江南市教育委員会